過去・現在・未来の原典生諸君へ！ (September 5, 2008)

原典研究所主宰　齋藤瀛涯

■原典研究所は創立（１９９６年）以来、「人間諸学」(les sciences humaines)の根拠たる〈世界〉の「原典(＝テクスト)性」の起源とその展開の諸相を探究することを目的とした、一連の教育・啓蒙活動に従事する一方、諸宗教・諸思想の根本典籍類の蒐集にも極力意を用いてきましたが、このほど、創立(あるいは存立)１２周年を記念して、一大稀覯書の購入に踏み切り、長年に亙る蒐書活動にも一応の終止符を打つこととしました。

■しかし、今回の購入において何よりも特筆すべきは、該書（**１５７８年刊行**の、いわゆる**ステファヌス版　『プラトン全集』**）の有する「人類の至宝」的価値を逸早く理解した鋭敏なる現役有志の発意と勧進とにより、教室 OB・OG の多数諸君からも多大の篤志が寄せられたことです。世代を超えた、原典生のこうした「有形無形の支援」（moral & material support ）は、また同時に、「発見的問答」(Socratic method)の実践道場たることを標榜する、原典研究所独自の語学教育（＝原典語学）に対する更なる督励でもあることに思いを致すとき、筆者の心は、この「原典中の原典」を当教室に集う全員にとつての、精神的意味での「共有財産」たらしめるべく奔走し、万事に協力を惜しまなかった諸君に対する満腔の謝意はもとより、自らを顧みて、深い感慨と言い知れぬ喜びに満たされたのでした。

■**「知を愛すること」**(philosophia）と**「よく生きること」**(bene vivere）に心を寄せる人々にとっては、まさに「知る人ぞ知る」大全集。しかもアメリカの大哲学者ホワイトヘッドをして「西洋の哲学的伝統は、プラトンへの一連の脚注から成っている」とまで言わしめた、哲人プラトン。フランス・ルネサンスを牽引したパリの名門出版業者エティエンヌ（ラテン語名ステファヌス）家の古典学者アンリ(父ロベールも新約聖書ギリシャ語版の校訂出版で著名）によって、１５７８年、国内に吹き荒れていた宗教戦争の嵐を避け、スイスのジュネーヴで刊行された本全集は、印刷本としては最大版型（folio / ３８cm）の三巻本で、総計２０００頁を超え、その威容は遥かに群書を 圧倒して孤高のうちに聳立しています。

■シェークスピアいまだ十有五に達せず、デカルトの生誕 に先立つこと凡そ２０年、かのモンテーニュが『随想録』の執筆に心血を注いでいた、まさにそのルネサンスの爛熟期に、それぞれ英国女王エリザベス一世(第一巻)、スコットランド王(第二巻)、そしてベルン共和国(第三巻)への献辞を冠し、ラテン的中世への永訣と近世への曙光を告げるべく打ち樹てられたこの一大金字塔は、前世紀フィレンツェ、メディチ家の「プラトン・アカデミー(学園)」以来の一世紀に及ぶ分厚い古典研究の蓄積を踏まえた長大な注釈を備え、全頁ギ リシャ語原文とラテン語訳の対照がなされた本格的な校訂出版としては、西洋哲学史上「最古にして最大」のもので、現在もなお参看に堪え得る実質的な内容と存在意義とを有しています。

■旧蔵者である、英国の某貴族の配慮になると思しき壮麗なる修復が施されたこの超豪華三巻本は、多少の経年変化の痕跡を外形上の諸所に留めているとはいえ、内部は殆ど無傷のまま、扉にエティエンヌ家の名高い家紋と家訓が鮮やかに刻印された、奇跡的に良好な保存状態で、文字通り４００年の時空を超え、今や遂に原典研究所の所蔵に帰したのです。

■以上、“Platonis Opera quae extant omnia”(ラテン語原題、『プラトンの現存全著作』)購入の経緯をいわば「公開」し、かつ、その意味を些か立ち入って説明したのは、今回、すでに冒頭でも触れたように、あらかじめ「実物」を目にすることも、またその価値を問い質すこともなく、専ら原典研究所に寄せる友情と信任のゆえに、OB・OG の多くの諸君が、――この間の事情をよく知る現役の原典生ともども――快く醵出に応じ、筆者の負担を大いに軽減してくれたことに対して、心からなる感謝の意を表明することは言うに及ばず、語の真の意味での、更なる「説明責任」accountability がある、と思われたからです。
■ここで、きわめて異例のことながら、事の重大性に鑑み、かつまた原典研究所の創設理念を改めて世に問うべく、史上三度目の「プラトン・アカデミー」設立プロジェクトの参加者の芳名を以下に特記(アイウエオ順)し、謝辞に代えることとします。**皆、ありがとう！**

■なお、該書購入に端を発した上記『プロジェクト』への参画者の募集活動は、その首唱者にして勧進者たる若き同志、木村太亮君［東京大学・法科大学院］の熱誠と尽力とに負う所が頗る多く、よって以下特に同君に委嘱し、活動の経緯を綴って貰うこととしました。

本プロジェクトの幹事より、御挨拶・御礼粛啓　(September 5, 2008)

原典研究所塾生代表　木村太亮

◆皆様の「善意」bona fides による御協力により、光栄にも今回の一大プロジェクトの幹事を務めさせて頂いた者として、本プロジェクトの全般的な経緯の説明をして幹事としての「説明責任」を果たさせて頂くと共に、「知的な同志愛」に基づいて御尽力頂いた皆様「全員」に対して、心から御礼申し上げるべく、甚だ拙文ながら一筆啓上申し上げます。
◆事の発端は、本年 6 月上旬頃に頂いた「西洋精神世界の究極の逸品を購入する。これに諸君の協力があれば、原典生皆が共有出来る精神的な結束の証になるだろう。」という旨の齋藤先生のお言葉です。この理念を実現すべく速やかに行動を起こすのが、長年恩顧を蒙ってきた者の責務であり、恩返しでもあると考え、皆様へのお声がけを開始致しました。
◆このように始まった私の拙い呼びかけに対し、本当に有難いことに、皆様が快く理解を示して御協力下さり、そのお蔭で、当初より順調に皆様から篤志を頂くことが出来ました。「ステファヌス版を、新・旧世代を超えた原典生の象徴的共有財産にする」という当初の目的を実現すべく、卒業生の方・現役生の方を問わず、世代を超えて多くの皆様に、寄付のお願いをさせて頂きました。結果的に(不肖、私を含めさせて頂きます)、43 名の皆様から、計 309,023 円(銀行の預金利子を含む)という多大なる寄付金を頂戴致しております。
◆この結果は正しく、原典生の世代を超えた「知的な同志愛」が形として実を結んだものであり、我々が誇るべき大成果です。また、誠に至らぬ幹事でありながら、同じ学び舎に学んだ(/でいる)同門として、私のことを信認して御協力頂いた皆様の暖かい御支援に対し、言葉では表現出来ない程の、熱い思いが込み上げて参ります。本当に有難うございました。
◆最後に、皆様が各方面に於いて八面六臂の活躍をなさることを御祈念申し上げると共に、原典研究所の更なる飛躍のため、今後とも御協力頂けますよう心よりお願い申し上げます。

■なお、以下の一覧は現役の高校生、大学生、大学院生および社会人を含んでおり、現在の原典研究所との関係を一義的に明示することは極めて困難なため、進学先または在学中の大学名のみを記すこととします。また、それぞれの在籍期間も区々たる様相を呈しているため、高校卒業年次を基準とはせず、創立年（１９９６）度の入会者すなわち第１期生から、今年（２００８）度の第１３期生まで、ローマ数字による入会年次を以て概略的に期別表示し、過去１２年間の原典研究所のささやかな歩みをも辿らしめることとしました。

【篤志者一覧】（11/03 修正）

甘木大己　Ⅳ　［東京大］
石橋洋平　Ⅹ　［慶應大］
稲塚大氣　Ⅵ　［東京大］
稲塚万佑子　Ⅹ　［東京女医大］
大江弘之　Ⅹ　［早稲田大］
大場晶夫　Ⅵ　［東工大］
緒方志光　ⅩⅢ　［東京大］

神尾雄一郎　Ⅴ　［慶應大］
川崎浩史　Ⅷ　［慶應大］
木村太亮　Ⅳ　［東京大］
熊谷征爾　ⅩⅢ　［東京大］
熊倉潤　Ⅶ　［東京大］
五味太志　Ⅷ　［東京大］

齋藤静　Ⅰ　［慶應大］
坂本恭太郎　ⅩⅡ　［東京大］
佐藤翔　Ⅶ　［京都大］
佐藤雄太　ⅩⅡ　［東京外語大］
柴崎康平　Ⅵ　［慶應大］

高取正大　ⅩⅡ　［慶應大］
瀧塚清孝　ⅩⅠ　［早稲田大］
田口恵子　Ⅵ　［早稲田大］
竹内基紘　Ⅶ　［慶應大］
田中伸明　Ⅸ　［東京学芸大］
手島望　Ⅶ　［慶應大］

豊田昂希　Ⅸ　［早稲田大］

中島立博　ⅩⅢ　［東京大］
中津井亨　Ⅴ　［東京大］
二宮周蔵　Ⅸ　［東京大］
二宮寛明　ⅩⅡ　［巣鴨高］

羽鳥潤　ⅩⅡ　［東京大］
樋野貴宏　Ⅷ　［東京大］
日野正博　Ⅶ　［慶應大］
布施俊輔　Ⅰ　［東京大］
古田昂一郎　Ⅷ　［東京大］
堀田光海　Ⅵ　［東京大］

峰岸圭　Ⅶ　［慶應大］
三村一貴　ⅩⅢ　［開成高］
三森遼太　Ⅹ　［日本大］
宮村悠介　Ⅵ　［東京大］

山本修治　Ⅵ　［千葉大］
横田敦　Ⅵ　［一橋大］
横田絵里香　Ⅵ　［日本大］

渡邉要一郎　ⅩⅢ　［東京大］

総計　４３名
総額　309,023 円（銀行利子含む）